「根」

足裏 Vol. 33

先日、私の友人で日米で活躍している映画監督の紀里谷和明さんと会って話をしました。
彼は世界のトップランナーの知人友人も多く、会う度にアメリカ及び世界の動きを話してくれて、いつも大変刺激を与えてくれる友人であります。
今回、AIの話になり、現在世界の最先端ではあらゆるものが、すさまじい競争の中で変化し、その先端で覇を競い合っている人達は半ば狂気の様な中で新たなものを生み出していて、日本は既にその競争についてゆく力が無いと心配していました。

確かに世界ではアマゾンを始めとする新興企業が日に日に巨大化し、あらゆる業界の垣根をとり壊していっている状況は我々も知るところではあります。
そうした世界の流れの中で日本国内のマスコミ等が取り上げるニュースを見ていて、日本の未来に対して危惧の念を強く抱いている人は多いのは事実でしょうが、果たして日本はそうしたアメリカや中国の様な国と同じ様な競争をして、勝った負けたと一喜一憂する必要があるのでしょうか。
私は狂気の競争の行きつく先は、破滅しか無い様な気がしてなりません。

AIを始めとする先端技術の研究開発は、日本も従来以上に力を注いでゆかなければならないとは思いますが、そこに日本独特のプラスαを加えるとすると何か？
それは「心」ではないでしょうか。

人は何かに打ち込む事によって知識や技術を磨く一方で、己自身を磨いてゆく事が必要だと思っています。
他人の金やノウハウや商標を平気でパクって大きくなってゆく人や企業や国家が力を持っても、それは社会にとって評価されるものでは無いと思います。

もちろん、こうした事は職種や製品によっても異なるかもしれませんが、人が人に関わる仕事は、未来も存在してゆくと思いますし、AIが進化すればする程、そうした仕事の重要性が大きくなる様に思います。

AIと違い人は「心」を持っています。
そしてその「心」は、機械的なモノには反応しないと思います。

人が感動するのは、一途に何かに打ち込む人や、困難に立ち向かって何かを成し遂げた人にであって、いかに金をもうけたか、有名になったかといったものにではない様に思います。
とりわけ、正攻法の努力で得たモノ以外が、世の中の評価を得られないのは、いつの時代も同じだと思います。

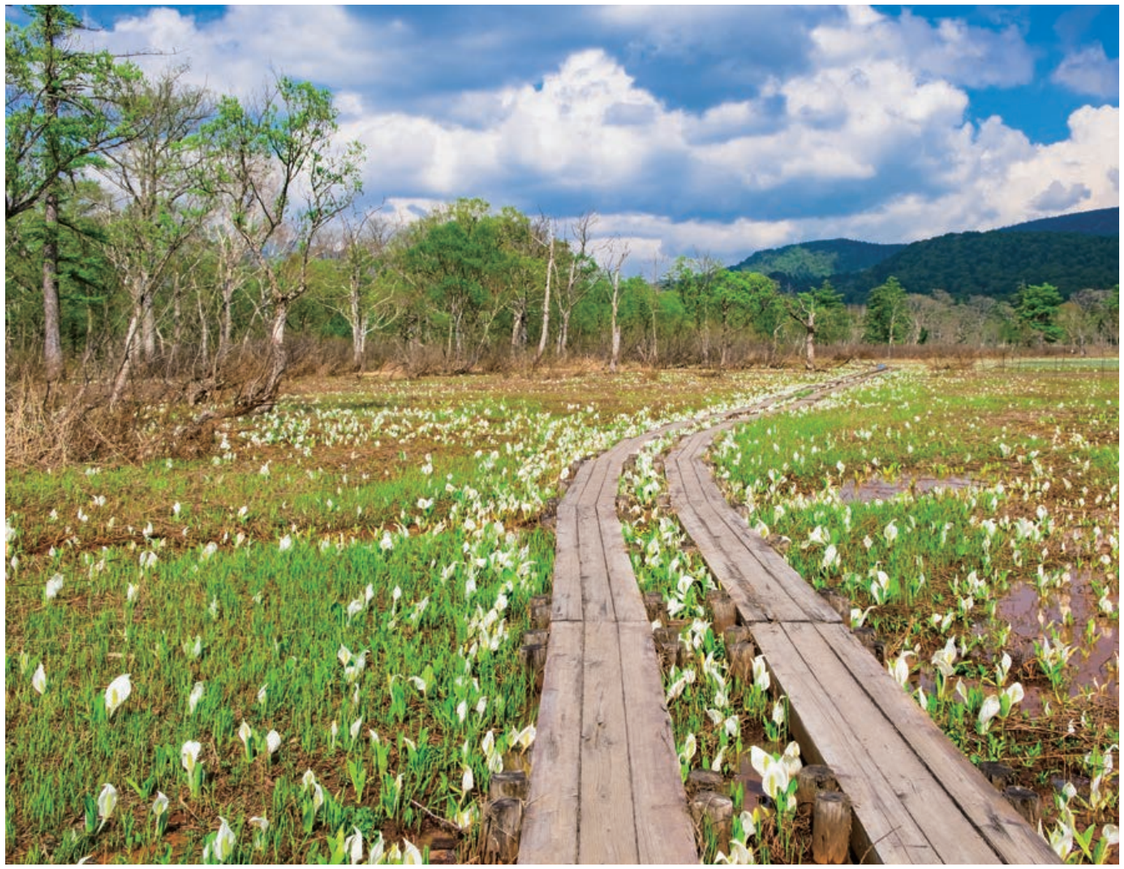
「不易流行」という言葉があります。
どんなに時代や文明や科学が進化しても、それをとり入れて活用する付随的な変化はしてゆかねばならないのはもちろんですが、根幹となる人間としての基本的な価値観や生き様は変える必要の無いものだと思います。

大樹には立派な根が有り、立派な根が有るから大樹は育つという当たり前の事を理解していれば、目前の競争に一喜一憂する必要はないと思います。
極端に自己中心的な人達が増え、そうした人達が集まる企業、国家は、社会を破滅に導くリスクが高いと思います。

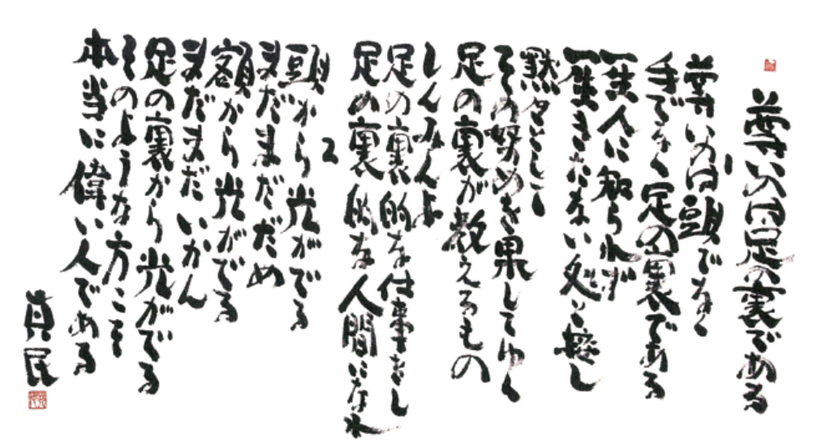
我々はこうしたテンポの速い、情報過多の時代だからこそ、物事の本質、根本を常に考える習慣を身につけたいものです。

今回も、故 坂村真民先生の詩を書いて終わります。

徳真会グループ
代表　松村 博史



撮影場所：尾瀬



尊いのは足の裏である

1
尊いのは
頭でなく
手でなく
足の裏である

一生人に知られず
一生きたない処と接し
黙々として
その努めを果してゆく
足の裏が教えるもの

しんみんよ
足の裏的な仕事をし
足の裏的な人間になれ

2
頭から
光が出る
まだまだだめ

額から
光が出る
まだまだいかん

足の裏から
光が出る
そのような方こそ
本当に偉い人である